

リレーおぴにおん

お金の人間学 6

作家

ふじわら のりゆき
藤原 敬之さん



59年生まれ。内外機関投資家で株式運用を担当し、2010年から作家に（筆名・波多野聖）。近著に「カネ遣いという教養」「カネ学入門」＝麻生健撮影

外資系金融機関で資産運用をしていた時、仕事の報酬による億を超える預金通帳を見て、なぜか嫌な気分になりました。お金の縛られ振り回されると本能的に感じたのかもしれない。

その後、マネージングディレクター（役員）に昇格し、何となく「嫌な気分」の正体ははっきりしたので。初めて役員として国際会議に出席した時のことです。一人で朝食を食べていると、他の役員たちがやってきて、「フジワラは個人的にどんな資産運用をしているのか」と聞いてきました。

「初対面のオレの懐を探るのか」。高額な報酬があるのに、さらに殖やそうとする彼らの執着心に違和感を覚えました。私は個人的な利殖に全く興味がないからです。結果を出した仕事への相当な報酬は当然求めましたが。

数百億円の資産を持つ大富豪たちと接する機会もありました。彼らに共通していたのは「誰も信用しない」という姿勢です。財産を死守し、次代に残すプレッシャーに人生が支配されている。お金持ちなのに決して幸せそうには見えませんでした。

結果的に私は富豪にはなれていません。稼いだ金は使ってしまうからです。大阪の中小企業経営者だった父親の影響かもしれません。父も投資や貯

幸せに見えなかった大富豪

蓄には興味がなく、「人生は楽しむモノだ」と気前よく使ってしまう。美食や好きなモノには金を惜しまない。

そんな父親の生き方に共感していました。国内金融機関に勤めた社会人3年目、学生時代から欲しかった33万円のイタリア製の椅子を買い、独身寮の6畳間に置いて喜んでいました。

金額の大小にかかわらず、感性に訴えかけてくるモノを迷わず購入してしまう。例えば、鯛をかたち取った魯山人の箸置きは20万円しました。径の大きい鎌倉彫の香合にこの箸置きを入れて、青布を敷いた鎌倉彫の皿に置いて鑑賞しています。幅6センチの箸置きが海を泳ぐ鯛のように見えてきます。

モノへのカネ遣いは、時にキツネに取りつかれたようにもなり、止まらなくなります。文房具、高級時計、ライカのカメラ、ハイエンドオーディオにそれぞれ高級車1台分のお金を投じました。そんなカネ遣いに後悔は一切ないのです。お金は人生を楽しむための手段に過ぎないからです。

借金をして生活を破壊するような浪費は慎まなければなりません。機嫌良く生きるためには、お金のためらわずに使うべきだと思っています。

（聞き手・土屋聡一）
◇次回は4月1日に掲載します。